

群 教 セ	E03 - 03
	平17.227集

児童が自他のよさに気付いたり、がんばりを認め合ったりできる指導の工夫

— 一人一人のキラリに気付く学級活動や道徳授業を通して —

特別研修員 穂苺 秀樹 (玉村町立上陽小学校)

《研究の概要》

本研究は、学級活動の中で一人一人のよさを見付けるキラリカードを活用したり、自尊感情を高めるための道徳を行ったりして、自他のよさやがんばりを認め合えることを目指した。具体的にはキラリカードの活用を図りながら自己を肯定的にとらえさせたり、他者を受け入れようとする態度を育てたりすることで、児童がお互いのよさやがんばりを認め合える活動を行った。

キーワード 【人権教育 学活 道徳 キラリカード 自尊・他尊感情】

I 主題設定の理由

高学年になると、相手の気持ちを考えて行動しなければならぬと分かっているにもかかわらず、自分が窮地に立たされると相手の失敗を責めたり、腹を立てたりしてしまうことが見られる。相手の心情を考え、おもいやりをもって接することが大切であることに気づかせていくことが必要である。そのためには、自分を押しすぎず、ふだんから、自己を受容する心情を高めていくことが大切である。同時に、自分勝手な言葉で相手を傷つけないように、相手を受容するような心情を育てていくことが大切であると考えられる。

自己受容とは、自分自身を客観的に見つめ、あるがままの自分を受け入れることである。自己受容できるためには、「自分が好き」という自尊感情の高まりが必要であるが、自尊感情を高めることで、他尊感情も高まっていくものといわれている。つまり、自分のよさに気付くことができ初めて、他者のよさに気付くことができるのである。

このように自己を肯定的に、自信をもって価値ある存在であると感じることができれば、他者の気持ちが理解できるようになり、多様な価値観と思いやり、優しさを育てることができると考える。

本学級（小学校6年生 男子16名、女子13名）の児童は最上級生として、行事や委員会活動に責任をもって取り組むことができる。しかし、人間関係がやや希薄で他者に対する関心が低く、自己や他者に対する見方や受け止め方が狭い児童も

見られる。例えば、困っている友達に対して、進んで手を貸してあげられなかったり、優しく声をかけてあげられなかったりするなど、仲間意識に欠けるところも見られた。このように「いい子ぶって」と非難されるのが嫌で、思ったことを素直に出せない雰囲気が学級にあるのが現状である。

また、自分に自信が持てない子どもや、まじめさを否定的に受け止めて友達と一生懸命に取り組むことから逃げがちな子どもも見られた。

そこで、「一人一人のキラリ」に気付く活動を学級活動や道徳の中に取り入れることによって、自分や相手のよさに気付く、自分や友達を肯定的に見ることができるようになる指導の工夫を行うことにした。これにより、相手のことを思いやる温かい心を育てたり、自分のよさや可能性を信じて努力する気持ちやお互いを認め合う気持ちを育てたりできるであろうと考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

学級活動において、キラリカードを活用したり、自尊感情を高める道徳授業を行ったりすれば、自他のよさに気付くことができ、自己を肯定的にとらえたり、他者を受容したりする態度を育てることができると実践を通して明らかにする。

III 研究の見通し

1 学級活動や帰りの会において、児童が以下の

ことに取り組めば、児童は自他のよさに気付くであろう。

(1) 帰りの会で、教師が児童に一日の生活を振り返りさせながら、自分や友達ががんばっていたことを肯定的にとらえさせることで、自他のよさやがんばりに気付かせる。

(2) 教師が児童にいままでの運動会を振り返らせ児童に思い出に残る最後の運動会にするにはどうしたらよいかを話し合わせる。話し合いから実践までを自分たちの力で進めることで、協力することの大切さに気づかせたり、成就感を持たせたりすることによって児童が自分や友達のがんばりを認める。

2 道徳の時間において、自信を持っていない児童の自尊感情を高めるために、人に対する優しさや前向きに生きようとする勇気を感じ取ることで、「キラリと輝く人の生き方から学ぼう」の学習を行う。今の自分を見つめることにより、児童は、「自分のよさや可能性を信じて努力することの大切さ」、「人に対する優しさ」について真剣に考えることができるであろう。

3 学級活動で、児童がキラリカードを基に、「一人一人のキラリを探そう」の振り返りを行う。友達のキラリが特定の友達の偏っていないかを考えさせたり、キラリカードの内容の量から質への転換を図ったりすることで、本当のキラリとはどういうことなのかを考えさせる。それによって、お互いのよさを認め合い、相手のみになって発言し、行動するようになるであろう。

IV 研究の内容

1 基本的な考え方

(1) 人権教育について

人権とは、だれもが持っている普遍的な権利であり、人間として幸せを求めて生きる権利である。人権意識とは、互いを尊重し思いやり、自分も他人も大切にしようとする意識、そして、思いやりをさりげなく行動に表すことのできる意識にとらえた。児童が人権を尊重する豊かな心を持ち、人権の大切さや役割、人権にかかわる課題について理解・認識できるように配慮したい。

(2) 自他のよさやがんばりを認め合える児童とは本研究では「お互いのよさやがんばりを認め合

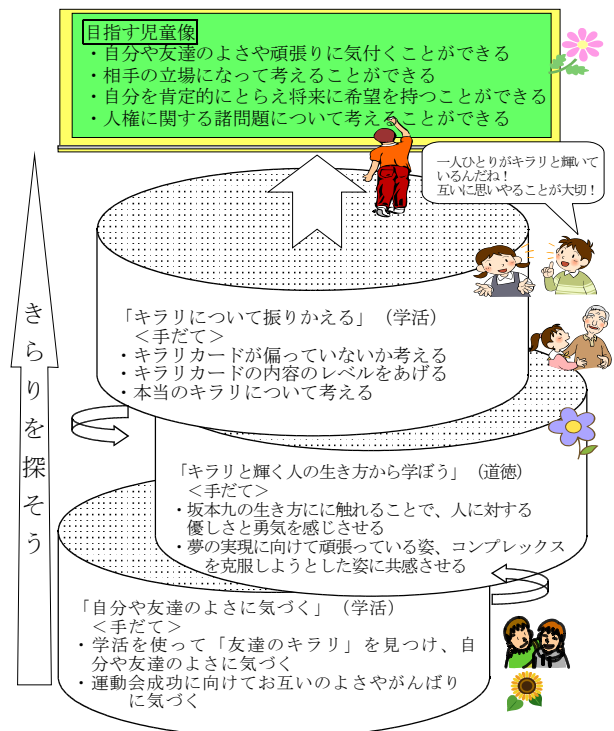
える児童」を、相手の気持ちを積極的に理解しようとする意欲を持っていたり、友達の立場や気持ちを大切にできたりする児童と考える。例えば、困っている友達がいたら助けたいと思ったり、気遣ったりできる気持ちを友達同士で共有できる児童と考えた。

(3) 「一人一人のキラリを探そう」の活動について

一人一人の『キラリ』を探すことで、児童が自己受容・他者受容することの大切さに気づき、「自分のよさや長所を自覚できる」「みんな違ってみんないいと実感できる」ようにしたい。人間は、だれでもキラリと光るすばらしいところを持っている。そんな『キラリ』を学活や道徳の学習の中で探し出し、考えを深める活動を通して、一人一人が明るく前向きに学校生活を送ることができるようにしたい。

研究に取り組むにあたっては、小学校6年生という発達段階を考えながら、カードを使った振り返り活動を行い、その際、児童の心の揺れに共感することで、教師は児童ができるだけ多様に表現できるようにする。また、「人を信頼する感覚」、「人から信頼される感覚」を感じられる雰囲気を作れるように配慮する。

(4) 全体構想図



2 実践の概要及び結果と考察

(1) キラリカードに記入することで、自分の考えを素直に表現したり、他人の意見を受け入れたりすることができたか。また、行事を通して、自分や友達の

よさやがんばりに気付くことができたか。(見通し1)

ア 実践の概要

(ア) 一日を振り返らせ、自分ががんばったことや友達ががんばっていたこと、友達からしてもらってうれしかったことなどについて発表させ、「友達のキラリ」を見つけて友達に紹介し、カードに書かせた。教師はそれに対してコメントを書いたり、掲示したりした。また、学級通信でも児童のよさやがんばりを伝えた。

(イ) 学級活動において、思い出に残る小学校最後の運動会にするにはどうしたらよいか、いままでの運動会を振り返り、気付いたことを基に運動会に向けての自分の目標を考えさせた。そして、目標を達成するために必要なことを話し合わせ実践までを自分たちの力で進めることで、協力することの大切さに気づかせたり、最後までやり遂げることで成就感を持たせたりした。そうする中で自分や友達のがんばりに気づかせるようにした。

また、「南中ソーラン」の練習では、ソーラン節には漁師の生き様や厳しさが描かれていることを考えさせた。「南中ソーラン」を通してお互いが高め合えるように、話し合い活動を行ったり、「がんばりカード」を書かせたりして頑張ったことや、練習を通して変化した心情などを読み取って励まし、児童のがんばりを通信で知らせた。

イ 結果と考察

(ア) いままで、友達のキラリを見つけていなかったA男が「友達が机をふくのを手伝ってくれてとってもうれしかった」(資料1)と書くようになるなど、友達のよさに気付くことができた。「友達のキラリ」を行うようになってから、自分や友達に対しての見方が変わってきたことはあるか、「振り返りカード」(資料2)に書かせて発表させたところ、「自分のがんばっていることを素直に発表できるようになった」、「なるべく友達のよいところをさがしたい」と答える児童が見られるなど、自分に自信を持ったり、友達を大切にしたいという感情が育ってきた。

その他にも、「カードが掲示されてあって、自分の励みになった」と答える児童が見られた。このことから、自分のよいところを見つけようとする気持ちが高まってきたと考えることができる。

また、「友達に悪口を言ってしまったことがあったけどなるべく友達のよいところを見付けるようにしたい」という感想や「友達のいいところを見付けるようになった」という感想が見られるな

ど、児童の自尊感情や他尊感情が高まってきたことが分かる。このように、カードに書かれている内容もより具体的になり、何気ない言葉で友達を傷つけていないかどうか考えることができたり、友達にはそれぞれよいところがあることに気づき、友達のよいところを見つけようと努力したりすることができた。

資料1 「キラリカード」の内容

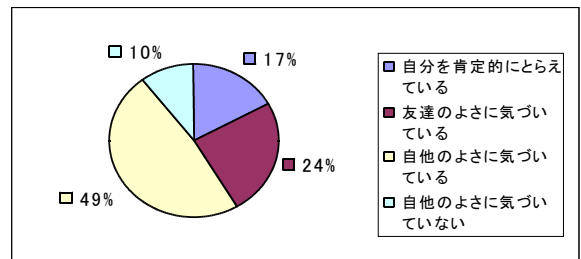
今日は、机に牛にゆうをこぼしちゃった。だけど、■■■■さんがすぐにどうきんをちめてきて机をふくのを手伝ってくれました。とってもうれしかった。

資料2 「振り返りカード」(抜粋)

最初は、みんなの前で発表するのは恥ずかしくていやだったけど、なれるうちにだんだん自分のおもったことを言えるようになってきた。友達のよさも少しわかってきた。

カードがはってあって、自分のいいところがあるの、ちょっとうれしかった。それからもっと自分や友達のいいところをさがしていこうとおもいます。

図1 「振り返りカード」の内容



(イ) A男は最初、「運動会なんてつまらない」と発言するなど、やる気を見せていなかったが、話し合いを続けていく中で、A男の心情にも変化が見られるようになった。やがて、「みんなで協力することの大切さがわかった」のように発言したり、運動会についての作文に、「学年行事の障害物競走やクラス対抗リレーでは負けてしまったけど友達と協力してがんばれることができたのでよかった」と書いたりしていた。(資料3)

また、南中ソーランの「がんばりカード」には、「南中ソーランの練習で漁師のすごさ、一生懸命さがわかった。自分も大変でも、あきらめずにがんばりたい」や「最初は、腰を落とすのが恥ずかしかったけど、自分も友達のいいところをまねし

て、じょうずに踊りたい」のように肯定的な感想を書く児童が見られた。(資料4)

このように、運動会に向けて話合いや練習をしたことを、「振り返りカード」や「がんばりカード」によって振り返らせることで、自分や友達のがんばりに気付くことができ、児童は友達のよさやがんばりを認め合うことができたと考える。

資料3 A男の表情や感想(抜粋)

○運動会前の様子

普段から努力することに消極的であった。また、協調性がなく、友達の悪口を言ってトラブルを起こすことがあった。徒競走が苦手で、「運動会なんてつまらない」と言うことがしばしばあった。

○運動会後の作文

運動会の「私が真を行け」は、自分たのみのムカデ競争でがんばったからよかった。クラスのルールも組と負けたけど、みんなががんばったからよかったとおもう。

資料4 「がんばりカード」の記述内容(抜粋)

- ・南中ソーランの練習で、漁師の人達のごさや一生けんめいさがわかった。自分もたいへんでも、あきらめずに最後までがんばりたい。
- ・最初はこしを落とすのが恥ずかしかったけど、自分も友達のいいところをまねして、じょうずにおどりたい。
- ・ビデオを見たときに、とてもかっこよかったと思ったが、こんなにできるのだろうか心配した。練習の時、足のももが痛くなったりしたが、先生たちが毎日練習の最後に「また、がんばりましょう」とみんなをほげましてくれたので、つかれがなくなったような感じがした。

(2) 道徳の教材「キラリと輝く人の生き方から学ぼう」から、自尊感情が高まり、自分や友達の『キラリ』に気付くことができたか。(見通し2)

ア 実践の概要

道徳の時間において、「キラリと輝く人の生き方から学ぼう～笑顔の贈り物～」の授業を行った。導入の段階で、夢や目標を持っているかどうか考えさせた。次に自作資料の前半を聞かせ、ニキビというコンプレックスに悩んでいた時の九さんの気持ちをワークシートの吹き出しに記入させた。その際、児童に失敗した時や何かに悩んでいた時のことを想起させながら、九さんの気持ちに共感させるようにした。そして、夢の実現に向けて努力するために大切な心情を考えさせ、ワークシートに記入させた。この時に、児童の心情の変化や心の揺れに共感させ、児童ができるだけ多様に表現できるよう支援した。自分を振り返る場面ではこれまで途中であきらめてしまったことや最後まで

でやり通せたことを思い出させ、なぜ途中であきらめてしまったのか、あるいは、やり通せた時はどんな気持ちだったかを考えさせ、自分の経験を発表させた。

最後に、九さんは自分の夢に向かって努力しただけでなく、福祉への活動を一生の仕事にしていたことや心の中にいつも、「悲しがついている人には幸せを、泣いている人には喜びを与えたい」と考えていたことを児童に伝え、自分なりの生き方を見つけ、それに向かって努力していく九さんの生き方や人を思いやる優しさについて考えさせた。

イ 結果と考察

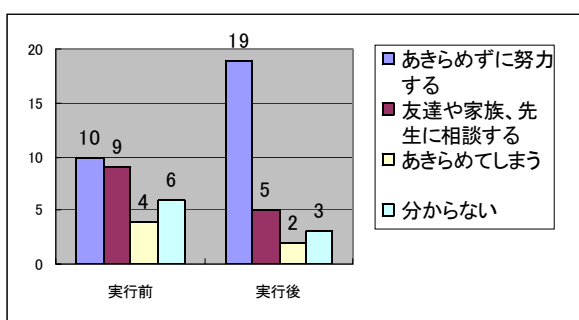
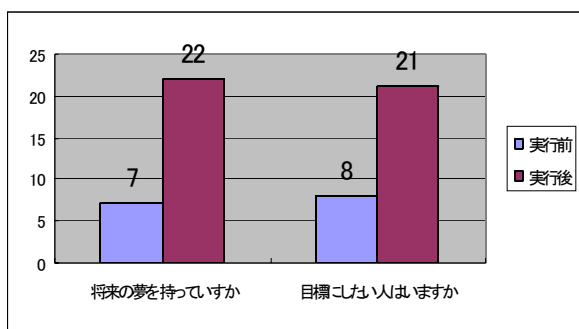
日常の観察や問題場面における反応、事前調査の結果をみると、自分の将来の夢についてしっかりとした考えをもっていたり、自分の夢や目標に向かって、日々努力することの大切さに気付いたりしている児童がいる反面、将来の夢や希望をもてなかったり、辛いことや乗り越えられない壁にぶつかった時に、どう克服すればいいか考えられずに、夢を簡単にあきらめてしまったりする児童も見られた。しかし、授業中の児童の様子や表情を見ると、教師や発言している児童の話に静かに耳を傾けていたり、友達のよい発言に対して、素直に拍手していたりするなど、いままでの自分を真剣に振り返っていた。このように、友達のよいところを素直に認めようとする感情が高まったことが分かる。(図2)

また、ワークシートの記述や授業後の感想を見ると「自分も九さんのようにたくさんの人に夢や希望を与えたい」「つらいことがあっても夢をもち続けることが大切」「宿題を忘れないようにするなど、今自分ができることをがんばりたい」「九さんの生き方から、相手を思いやる気持ちやがんばる気持ちの大切さに気付くことができた」といった肯定的な感想が多かった。このように、坂本九さんのコンプレックスに負けずに、夢や目標に向かって努力する姿に触れることで、児童の自尊感情が高まったと考えられる。(資料5)

努力することに否定的なA男も、「これからはできるだけがんばりたい」「友達のいいところを見習いたい」と感想を書いていた。このように、九さんの生き方を学ぶことで、児童の自尊感情が高まったり(自分らしく生きたいと思う)、他者理解(共に生きようと思う)が深まったりしたことが分かる。また、九さんはなぜ、コンプレックスを克服することができたのかを考えたり、夢に

向かって努力していった九さんの生き方に共感することで自分や友達のキラリに気付くことができたと考えられる。

図2 事前・事後アンケートの比較



資料5 ワークシートの記述内容(抜粋)

・3月までは、まだまだあるけれど、私がバスケを始めた理由はボールを使うスポーツが苦手だったからです。バスケを始めるとき、私はお父さんに「苦手だからやりたい。だからやらせてほしい」と言いました。お父さんが納得してくれて、今も続けています。
 ・水泳で、平泳ぎの50mがどうしてもできなくて「絶対泳いでやる！」と思い、水泳の時間はほとんど平泳ぎの練習をしていた。そして、平泳ぎ50mのテストがあったので思いきって泳いで顔をあげた時には、もう50mを泳ぎきっていました。その時はものすごくうれしくて、練習をいっぱいして良かったと心から思いました。
 ・「野球で県大会に行く」これがぼくの夢です。一度だけ県大会に行ったけど、その時は2回戦負け。この時はくやしかったので今度はもっといい成績を残したいです。

(3) キラリカードを基に、友達のキラリが特定の友達の偏っていないかを考えさせたり、キラリカードに書かれている内容を示しながら、ふだんの生活(友達に優しくできているか)を振り返らせたりすることで、お互いのよさを認め合い、相手のみになって発言したり、行動したりする大切さに気付くことができた。(見通し3)

ア 実践の概要

(ア) キラリカードに書かれている友達のキラリが発言力のある児童や仲のよい友達に偏ってきたので、できるだけいろいろな友達のよさを見つけられるように工夫した。例えば、「今日はこの5人のよいところを探しましょう」と児童を限定し

たり、クラス全体ではなく、班内でがんばりを発表し合ったりするようにした。これによって、児童はふだんあまり会話をしない友達のことに関心を持ったり、大勢の友達の前で話すことが苦手な児童でも、「少ない人数ならあまり緊張しなくていいや」と、気軽に話し合いができたりするようになった。また、「今日のキラキラ賞」を作り班の中からお薦めの一人を決め、その児童のがんばったことや優しくできたことを学級全員に紹介するようにした。このように友達のよさを見つけられる目を養うことができるように配慮し、各教科、学活、道徳のあらゆる場面において、児童が友達のよいところをたくさん見つけられるように学級の耕し(精神的なものを深めて広げる)を行った。

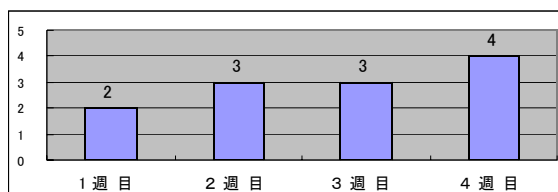
(イ) 活動がややマンネリ化したので、「先生はこういうクラスにしたい」ということを繰り返し訴え、児童にどんなクラスにしたいのか、友達のよいところを見付けるにはどうしたらいいのか、みんなで考える時間を設定した。そして、定期的にキラリカードを掲示したものを児童に見せ、本当に友達に優しくできているか、友達のキラリを見つけれられているかを児童自身で考えられるようにさせた。また、友達のキラリを見つけれない児童に対しては、友達のキラリによく気付くことのできている児童のキラリカードと比較させ、『キラリ』とは何かを考えさせるなどの、児童がキラリに気付くための手だてを考えていった。

イ 結果と考察

(ア) クラスで「今日はこの5人のよいところを探しましょう」と児童を限定して、ふだんあまり話したことのない友達の様々ながんばりに目を向けさせることで、A男の書いたキラリカードの対象は、発言力のある児童や仲のよい児童に偏ることはあまり見られなくなってきた。(図3)

また、振り返りカードを書かせて、学級全体の意見やいままでも自分のよいところを見つけられなかった児童の意見を探ったところ、班内で児童のがんばりを発表し合うことで、以前より友達のよいところやがんばりを見つけやすくなったという意見が増えた。このように、学級全体でがんばりを発表する方法から班の中で少人数で発表し合うことに変えたことは、児童に新鮮さを与えることができ(資料6)、班に分けて少人数で友達のよいところを見付ける方が、学級全体で見付けることに比べて、より多くの場面で友達のよいところを見付けてあげることができたからだと考える。

図3 キラリカードに記入した児童数



資料6 「振り返りカード」

いつも学級全体で発表し合うよりたまには、班ごとに発表する方がしんせんだし、前よりよいところを見つけやすくなった。今までは、仲のいい子はばかりだったよつな気がする。ほめられる回数も前より多くなつたのでよかったと思う。

(イ) 担任として、「自分はこんなクラスにした」という意見を繰り返し児童に訴え、「友達のよいところを見付けたり、お互いのよさを認め合ったりできる雰囲気を大切にしよう」という内容のスローガンを児童と一緒に考えていった。そして、このスローガンを基に「思いやりの木」を作って「今日のキラキラ賞」を貼るようにしたが、児童は「思いやりの木」に貼られるのを楽しみにするようになった。(資料7) これは、本当のキラリについて、クラスで話し合ったり、児童自身に考える機会を増やしたりすることで、友達のキラリについての理解が深まったからだ考える。

また、キラリカードに書かれている内容の質的な向上を行ったが、A男のキラリカードの内容は以前より具体的になることができた。(資料8) このことは、友達のキラリを見つけられない児童に対して、友達のキラリによく気付くことのできている児童のキラリカードと比較させることで、『キラリ』とは何かを児童に考えさせ、気付かせることができたからだ考える。

資料7 児童の感想

○小学校も残り少ないので、友達と仲よく過ごしたい。正面にある大きな木に、たくさんはってもらえるようにがんばってみよう。

資料8 A男のキラリカードの内容の変化

○以前のキラリカード

○○くんは、今日の園遊の時間、たくさん発言していました。

○最近のキラリカード

上陽さん? 修学旅行の思い出をつくっていたけど、字んが取りかかっていたんだ。だから、○○くんが、その使いかたを教えるんだ。その助かった。○○くんの修学旅行の思い出は、たくさん字んを使ってあってよかった。

V 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

○自分の考えを素直に表現できたり、他人の意見を受け入れたりできる雰囲気作りに努めたために、自他のよさやがんばりについて気付き、認め合おうとする気持ちが徐々に育ってきた。自分を価値あるものと考ええることによって、友達のよさやがんばりを素直に認めることができるようになったと考えられる。

○人間関係が豊かになり、他者に対しての関心が高まった。自分とは異なる考えの中にあるよさや独自性に気付き、友達のよさを進んで見つけようとする態度が育ってきたと考えられる。

○道徳の授業から、キラリと輝く人の生き方に触れることによって、自分のよさや可能性を信じて夢や目標に向かって、日々努力することの大切さに気付くことができた。コンプレックスに負けずに、夢に向かって努力していった登場人物の生き方に共感することで自分や友達のキラリに気付くことができたと考えられる。

以上のように、自己を肯定的にとらえさせたり、他者を受け入れようとする態度を育てたりすることで、お互いのよさやがんばりを認め合える児童が育ってきたと考える。

2 今後の課題

自他のよさやがんばりを認め合おうとする気持ちは育ちつつあるが、さらにお互いに認め合おうとする児童の気持ちをほぐすためには言葉で繰り返し説明するだけでなく、各教科・道徳・学活といったあらゆる場面において、児童に考えさせなければならないと考える。例えば、友達が話しているときに、耳を傾けることができなければ友達のよいところを見付けることはできないであろう。一人一人をしっかりと見ること、一人一人のがんばりを認めること、自分の気持ちを伝えることを、ふだんから身につけさせなければならない。そのためにも友達のキラリを見つけ、認め合おうする気持ちや優しさが、一部分から全体に広がっていくようにクラスの精神的なものを深めて広げていけるようにしていくことが必要である。

<参考文献>

・八巻寛治・吉澤克彦 著 実践 構成的グループエンカウンター 明治図書 (2004)

(担当指導主事 萩原 勝義)